

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02405

研究課題名(和文)近世・近代のヴラフ人の移動と集団形成に関する基礎的研究：バルカン・中欧・新大陸

研究課題名(英文) Study on the mobility and the group formation of the Vlachs in the early modern and modern world

研究代表者

秋山 晋吾 (AKIYAMA, Shingo)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：50466421

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、バルカン半島南部から近世以降中欧、新大陸に移住し、コミュニティを形成したヴラフ人と呼ばれる集団を歴史学的観点から研究するための基礎を構築することを目的とした。東欧各国史を専門とする研究チームにより、各国民史におけるヴラフ人の位置づけの整理、各国アーカイブの文書所蔵状況の調査、事例研究に基づく近世から近代にいたるヴラフ人の移動と集団形成の時代的および地理的段階性の総合的把握という3つの課題を遂行した。Covid19パンデミックのため、研究期間後半には現地調査が予定通りに遂行できなかったが、ヴラフ研究の基盤を整えることができた。成果論集は近年中に公刊予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代世界における国境・地域を越えた移動の活発化、多文化・多言語の共生の実態を把握し、問題を抽出するにあたって、近代以前に生じていた人々の移動と集団の変容過程に関する研究は不可欠である。バルカン半島を北上したヴラフ人の移動過程は、21世紀に活発化している中東・アフリカからヨーロッパへの人の移動の原型といえ、今日的なものとみえる現象の歴史的意味を考えることに、本研究は貢献するものである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to establish a basis for the study from historical perspective of the Vlach people, who migrated from the southern Balkans to Central Europe and the New World and formed communities in the early modern period and after. A research team specializing in the history of Eastern European countries carried out three tasks: analyzing the position of the Vlachs in their national history narratives, investigating the documents in the archives of each state, and comprehensively grasping the temporal and geographical stages of Vlach migration and group formation from early modern to the modern era based on case studies. Due to the Covid19 pandemic, the field survey could not be carried out as scheduled in the second half of the research period, but the foundation for Vlach's research was ready. A collection of the proceedings will be published in recent years.

研究分野：東欧近現代史

キーワード：ヴラフ 東欧 バルカン 移動 集団形成

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近年、地域・国家・大陸の境界線を越えて移動する人々に関する歴史学からの関心は高まりを見せている。なかでも、キリスト教的ヨーロッパとイスラーム的中東との接触地帯にあたるバルカン半島は、中世末・近世のオスマン帝国拡大の時期から、近代の帝國的秩序から国民国家秩序への移行、さらには、現代の大戦・冷戦の経験と EU・シェンゲン圏の内と外の形成にいたるまで、人の移動が広範かつ多元的に展開された舞台としてとくに注目されている。

バルカンを中心とした人の移動の歴史への関心は、1990年代の一連のユーゴ紛争を一つの契機として、20世紀初頭にその多くが引かれた国境線の不安定さが露わとなったとともに、境界線を越えて移動する人々が歴史的に常に存在していたこと、そうした人々が境界線を跨ぐ広域の空間の一体性を体現していたことが強く意識されたことが背景にある。また、2000年代のEUの東方拡大もそうした研究動向を促進したといえる。こうした研究動向のなかで、国民国家の再定義やEU統合といった現代の動きは、政治的・経済的・軍事的な動静と人の移動を近世以降の長期的な展開のなかで把握し、かつ、バルカンという地域内部とそれに隣接する地域(とくに中欧)さらには欧州域外という段階的な空間的広がりを視野に入れながら考察することなくして理解することができないということが明確に意識されるようになった。

こうした流れのなかで、先行する研究プロジェクト「18世紀ハンガリーにおけるギリシア商人の社会的研究」(科研費若手(B)H23-25年度代表:秋山晋吾)、「商人・難民ディアスポラと近世社会」(科研費挑戦的萌芽 H27-29年度代表:秋山晋吾)共訳プロジェクト K.カーザー著『ハプスブルク軍政国境の社会史』(越村・戸谷編訳・秋山ほか訳、2013年)は近世を起点とした長期的な人の移動と地域の形成を問題化し、さらに、ハンガリー科学アカデミーとの二国間共同研究「東中欧・バルカン地域の人・モノの移動に関する考察」(H25-26年度代表:山本明代(名古屋市立大学))では、現代にまで至る中欧とバルカンの移動を多角的に把握することを進めてきた。

本研究「近世・近代のヴラフ人の移動と集団形成に関する基礎的研究:バルカン・中欧・新大陸」は、これらのプロジェクトを基盤としつつさらに発展させ、近世の帝國的秩序から近代の国民国家的秩序への移行という時間的段階性、バルカン域内・中欧・新大陸という地理的広がり、段階性を構造的に整理しながら、移動と集団形成の動態を把握することに努めた。

この課題を考察するうえでもっとも適切な題材として、本研究は「ヴラフ人(vlach, vláh, βλαχολι)」に着目した。近世から近代にかけて、バルカン域内から中欧・新大陸まで広域に移動した集団であるという点において上記の課題に適合するだけでなく、バルカンと移住先において形成したコミュニティが周囲の諸人間集団から差異化されつつ包摂され、また、国民形成の中核とならずに他の諸国民の争奪の対象となったという点において、移動と集団形成の多元的かつ動態的な把握を試みる枠組みとして最適な研究対象である。

2. 研究の目的

本研究の対象であるヴラフ人の歴史は、国民国家を形成しなかったがゆえに、バルカン諸国においては、各国の国民史叙述のなかに組み込まれるか、あるいは国民史の中に溶融されて扱われてきた。また、中欧やアメリカ、オーストラリアにおいては、移民マイノリティとしての他者として補足的に扱われてきた。本研究では、多言語にまたがる先行研究文献を網羅的に調査し、その全体像を得ることを第1の課題とし、並行して、各国の文書館・博物館におけるヴラフ人関連資料の所蔵状況を、時期的・地理的な段階性を基準に整理することを第2の課題とした。これら基礎的な研究作業に基づき、第3の課題として個別事例研究を通じた見取り図の獲得を研究期間中に目指した。

(1) 各国民史叙述におけるヴラフ人の位置づけ・研究動向の網羅的把握

「ヴラフ人」とは、南スラヴ語およびギリシア語が優勢のバルカン半島南部に分散して居住するラテン系言語の諸集団を指すが、歴史的・社会的文脈の中で、移牧・放牧あるいは商業を生業として広範囲を移動する集団、また、君主に対する軍事奉仕を担う武装農民集団も意味した。後者においては、集団の規定は、言語ではなく生業や来歴・特権に基づいていた。このような集団の定義の多層性のゆえに、また、近代に国民国家を形成しなかったことも伴って、ヴラフ人の歴史は、近代以降成立していった各国民史叙述のなかに組み込まれ、溶かし込まれ、あるいは争奪されてきた。たとえば、ギリシア、ブルガリア、セルビアの国民史においてはそれぞれの国民のサブ集団として、ルーマニア国民史においては同じラテン系言語を話す遠隔地近親集団として、クロアチアやハンガリーの国民史では近世に到来してきた移民集団として、新大陸においては近現代に到来する東欧系新移民マイノリティとして扱われる。本研究の第1の課題は、これら各国・各言語での歴史叙述・研究動向を網羅的に整理することを通じて、ヴラフ人という集団カテゴリーの内容と外縁をめぐる認識・ナラティブの対立と共通性を明確にすることとした。

(2) 各国の文書館・博物館に所蔵されたヴラフ人関連資料の横断的把握

ヴラフ人に関する資料は、国民史の主体とならなかったがゆえに編纂・刊行が進められておらず、各国の中央文書館・地方文書館・図書館等に分散して所蔵されている。近世の村落徴税簿、教区簿冊、移民登録簿をはじめ、近代のマイノリティ定期刊行物にいたる諸資料を、現地のアーキビストと連携することにより時代的・地理的に横断的に整理し、それにより、ヴラフ人の移動と集団形成が現地社会のミクロなレベルで同時代にどのように認識され、記録されたかに関する基礎的な見取り図を得ることを目指した。

(3) 事例研究を通じたヴラフ人の移動と集団形成の時間的・地理的広がり概観的把握

上記2つの基礎的調査・研究に基づき、ギリシア北部マケドニア地方、ブルガリア・セルビア国境ティモク川流域、クロアチア軍政国境、スロヴァキア東部地方、ハンガリー・オーストリア商人集住地域、アメリカ・オーストラリア移民コミュニティを主な題材として進める事例研究により、ヴラフ人の移動と集団形成を時間的・地理的に類型化することを進めた。

3. 研究の方法

本研究は、各国民史におけるヴラフ人の位置づけ整理、各国アーカイブの文書所蔵調査、事例研究に基づく近世から近代にいたるヴラフ人の移動と集団形成の時代的および地理的段階性の総合的把握という3つの課題を遂行するため、当初4年間、研究期間延長により最終的に6年間の研究期間中に8名のプロジェクトメンバーが、個別の現地文書館・博物館調査をそれぞれ複数回実施した。また、メンバーによる合同調査を、ヴラフ集住地域であるギリシア、ブルガリア、セルビア、北マケドニアにおいて3回に分けて実施する計画であった（Covid19流行により、ギリシアでの合同調査のみ実施）。

研究体制は以下の通り。

組織図	1) 国民史 叙述調査 担当	2) 文書館・博 物館現地調査 組織担当	3) 事例研究	
			時代	テーマ
秋山 晋吾	ルーマニア・ハンガリー		近世	ハンガリー・ルーマニア・ブルガリアのヴラフ商人
戸谷 浩	ハンガリー・オーストリア		近世	クロアチア・ハンガリーのヴラフ人難民・武装農民
山本 明代	アメリカ・カナダ・オーストラリア		近現代	新大陸のヴラフ労働移民とコミュニティ形成
木村 真	ブルガリア		近代	ブルガリア国民再生とヴラフ人
松浦 真衣子	ギリシア		近代	ギリシア・ネオヘレニズムの中のヴラフ人
山崎 信一	セルビア・クロアチア・マケドニア		近現代	ユーゴスラヴィア主義の中のヴラフ人
香坂 直樹	スロヴァキア		近現代	スロヴァキア国民史とヴラフ人
早坂 由美子	ブルガリア		近代	都市建築とヴラフ人

4. 研究成果

本研究の研究成果を、上に記した3つの研究課題に即してまとめると以下の通りである。

(1) 各国民史叙述におけるヴラフ人の位置づけ・研究動向の網羅的把握

本研究では、メンバー全員が参加して年間2~3回（期間中計11回）の研究会（Covid19流行下ではオンライン）を開催し、各メンバーの担当する各国民史叙述におけるヴラフ人関連文書の整理とヴラフ人の位置づけに関する研究発表を行った。その結果、バルカン各国の歴史叙述においては、ヴラフ人に関する文献は量的にも多く、その位置づけが極めて論争含みであることが明確になった。とくに多量の文献があるギリシアにおいては、近代ギリシア国民の形成過程に、他言語の住民諸集団をいかに組み込んでいくか、それらの諸集団をギリシア国民・ギリシア人として包摂するレトリックの構築が中心的な課題とされてきたことが明らかになった。同様にヴラフ研究の伝統が長いルーマニアにおいては、19世紀以降、バルカン半島におけるラテン系

言語集団のカテゴリー化の問題とルーマニア国民の範囲の問題が不可分となり、バルカン南部に散在するラテン系言語集団（ヴラフ諸集団）を、ドナウ以北のルーマニア人の一部として主張することが、とくに戦間期までヴラフ研究のみならず、ルーマニア国民史叙述の主軸となっていたことが浮かび上がった。ブルガリア、旧ユーゴスラヴィア諸国におけるヴラフ研究は、これまで国民史の水準で議論になることが少なく、文献の蓄積についても不明な点が多かったが、本研究での文献調査により、とくに地方史やエスニックマイノリティ団体による出版が広く行われていることが分かった。これらは、とくに1990年代以降の欧州統合を目指すエスニックマイノリティ文化支援の一環として行われた側面もありつつ、マイノリティ諸団体の活動の主要要素として展開されており、ヴラフという問題の幅の広さを明らかにするものと言える。また、カルパチア山脈北部のスロヴァキア山岳部における「ヴラシュキ（ヴラフ）」と呼ばれる住民集団についての文献調査においては、ラテン系言語出自とは切り離され、牧羊集団としての意味に収められる形でヴラフなるものが象徴され、それが、近現代のチェコスロヴァキア主義の構築にあたって、山の民としてのスロヴァキア人の国民イメージの形成に結び付いていった過程が明らかになった。さらに、オーストラリアの関連文献調査を通じては、移民集団の名乗りにおいて、ヴラフが「マケドニア人」「ギリシア人」のカテゴリーに内包されていく過程を観察することができた。これらの調査結果は、公刊を予定している成果論集の第1部として発表する準備を進めている。

(2) 各国の文書館・博物館に所蔵されたヴラフ人関連資料の横断的把握

この課題は、Covid19 流行時の現地調査実施困難のため、予定通りには遂行することができなかったが、ギリシア北部（セレス、カストリア、メツォヴォ、ヨアニナなど）のヴラフ関連博物館については研究チーム合同による現地調査により展示・所蔵資料の実態を把握した。また、ブルガリア（ソフィア）、北マケドニア（オフリド、クルシェヴォ）、スロヴァキア（オラウスキー・ポドザーモク）におけるヴラフ関連資料は、研究チームメンバーによる個別の調査により、とくに地方の小規模博物館における所蔵の実態を把握することができた。これらの成果も、成果論集第1部において公開する予定である。

(3) 事例研究を通じたヴラフ人の移動と集団形成の時間的・地理的広がりへの概観的把握

現地調査・文献資料調査を踏まえた事例研究に関しては、研究会では各メンバーから以下のようなテーマで研究報告が行われた。

- ・秋山晋吾「18-19世紀転換期ペシュトのギリシア人とヴラフ人とセルビア人」
- ・早坂由美子「ヴラフの高地集落を都市史的に検討する手がかり」
- ・松浦真衣子「キクラデス諸島のカトリック教徒・聖母像、国民国家、地域文化のつながり」
- ・山本明代「ヴラフ・アイデンティティをめぐるポリティクスとディアスポラ・コミュニティ」
- ・山崎信一「セルビア東部の「ヴラフ」をめぐる」
- ・香坂直樹「(チェコ)スロヴァキアの地域・国民アイデンティティと「ヴラフ」」
- ・戸谷浩「近世ハンガリーにおいて“ヴラフ”とは誰であったのか？」

これらの報告を基にした論考は、成果論集の第2部として公表される予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 山本明代	4. 巻 989
2. 論文標題 第二次世界大戦期の東中欧におけるセーケイ人の移動と地域の形成	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 134-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 岩崎巖・秋山晋吾	4. 巻 9
2. 論文標題 史料としてのハプスブルク君主国『軍人職階表』	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 一橋社会科学	6. 最初と最後の頁 25-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/28627	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 戸谷浩	4. 巻 50
2. 論文標題 川の街コマーロムのマイノリティ：『トート人』、スロヴァキア人、そしてハンガリー人	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国際学研究（明治学院大学）	6. 最初と最後の頁 129-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Yamamoto, Akiyo	4. 巻 28
2. 論文標題 US Hungarian Refugee Policy, 1956-1957	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The Japanese Journal of American Studies	6. 最初と最後の頁 127-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山本明代	4. 巻 148-149
2. 論文標題 第二次世界大戦期ハンガリーにおけるドイツ系住民の強制移住と地域社会	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史の理論と教育	6. 最初と最後の頁 27-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山本明代
2. 発表標題 第二次世界大戦期の東中欧におけるセーケイ人の移動と地域の形成
3. 学会等名 2019年度歴史学研究会大会近代史部会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本明代
2. 発表標題 冷戦期アメリカ合衆国の難民政策と家族 ハンガリー難民受入れと難民支援からみる家族と女性の性別役割
3. 学会等名 日本アメリカ史学会第16回年次大会、シンポジウムC「抵抗の場としての『家族』」 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松浦真衣子
2. 発表標題 ヴラーフからみるギリシャのマイノリティ問題
3. 学会等名 欧州学フォーラム2019 ヨーロッパのマイノリティとマジョリティ (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本明代
2. 発表標題 1956年のハンガリー革命と難民支援のなかの女性たち
3. 学会等名 北米エスニシティ研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本明代
2. 発表標題 1956年のハンガリー革命後の難民学生による社会運動
3. 学会等名 社会思想史学会大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 柴宜弘、山崎信一、阿部俊哉、石田信一、上畑史、江川ひかり、遠藤嘉広、大塚真彦、奥彩子、長有紀枝、角田光代、唐澤晃一、齋藤厚、鈴木健太、千田善、長島大輔、中島由美、西浜滋彦、橋本敬市、林佳世子、平野共余子、松永知恵子、村上亮、百瀬亮司、山崎佳夏子、山崎日出男	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 388
3. 書名 ボスニア・ヘルツェゴヴィナを知るための60章	

1. 著者名 南塚信吾、小谷汪之、秋山晋吾、割田聖史、日高智彦、鹿住大助	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 280
3. 書名 歴史的に考えるとはどういうことか	

1. 著者名 秋山 晋吾	4. 発行年 2018年
2. 出版社 星海社	5. 総ページ数 285
3. 書名 姦通裁判 18世紀トランシルヴァニアの村の世界	

1. 著者名 田中ひかる編、田中ひかる・崎山直樹・竹本真希子・山口守・山本明代・梅森直之・篠田徹 著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 298
3. 書名 社会運動のグローバル・ヒストリー	

1. 著者名 羽場久美子編、秋山晋吾、戸谷浩、山本明代、ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 372
3. 書名 ハンガリーを知るための60章	

1. 著者名 戸谷 浩	4. 発行年 2017年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 189
3. 書名 ブダペシュトを引き剥がす	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	戸谷 浩 (TOYA Hiroshi) (00255621)	明治学院大学・国際学部・教授 (32683)	
研究分担者	木村 真 (KIMURA Makoto) (20302820)	日本女子大学・文学部・研究員 (32670)	
研究分担者	松浦 真衣子 (MATSUURA Maiko) (40737235)	高知工業高等専門学校・ソーシャルデザイン工学科・准教授 (56401)	
研究分担者	山本 明代 (YAMAMOTO Akiyo) (70363950)	名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授 (23903)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	山崎 信一 (YAMAZAKI Shinichi)		
研究協力者	香坂 直樹 (KOSAKA Naoki)		
研究協力者	早坂 由美子 (HAYASAKA Yumiko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------